

春の日向往環を歩く

日向往環歴史ウォークin山都町

春の花が手を振り出迎える 歴史と文化をたどる街道

3月20日、21日の2日間、「日向往環歴史ウォークin山都町」が開催され、旧藩時代の歴史街道を4つに分けたそれぞれのコースで、約1000名の参加者が街道の歴史を体感しました。

日向往環の起点は、熊本市の札の辻。肥後と日向（宮崎県延岡市）を結ぶ基幹道として、多くの人たちの暮らしを支えてきました。江戸時代、明治時代と庶民の交易路になり、馬見原や浜町は宿場町として繁栄してきます。

大正時代、俳人種田山頭火は初夏の日向往環を旅する道中である有名な「分け入っても分け入っても青い山」を詠んだと言われています。また、17歳のときに馬見原を訪れた、歌人若山牧水は「馬見原はしゃれたまちである」と日記に残すなど、文人にも影響を与えるほどの景観と人々の姿が伝わっています。

その後も、石橋や石畳、杉の並木が当時の面影を残したまま人々の生活を見守っています。

コースは、A通潤橋から馬見原までの「がんばれコース」(22km)、B馬見原の商店街周辺を巡る「馬見原歴史散策コース」(7km)、C八勢目鑑橋から通潤橋までの「ゆつくりコース」(20km)、D通潤橋と浜町商店街を巡る「浜町歴史散策コース」(8km)の4つ。B馬見原歴史散策コースでは、商店街の歴史を知るための勉強会を開いてきた馬見原街づくり協議会のみなさんが参加者をご案内。ハンドマイクを片手に各所でレクチャーしていきます。「へえ」と感嘆の声が商店街のあちこちで聞かれました。

2日目の通潤橋前では、九州新幹線全線開業1年前のイベントとして、かみましき郷土フェアが行われ、上益城郡5町の郷土芸能の披露や、山都町ころつけ街道が紹介されました。

第5回を迎えたこの歴史ウォーク近年のウォーキングブームもあってか、年々参加者が多くなっています。観光協会やインストラクター協会、そして馬見原街づくり協議会など地元の方々の熱心な取り組みが、人を呼び込んでいるのだと感じます。



1



2



3



4



5

- 1 街道沿いには菜の花をはじめいろいろな春の花が咲いていました。
- 2 Bコース。歴史を感じさせる衣装でガイド。
- 3 コースには各所に休憩所が準備されており、地元の方が参加者をもてなしました。(男成神社前)
- 4 Dコースでは通潤橋の歴史を聞きながら渡ります。
- 5 Cコース金内地点。急勾配の坂道もあります。

